

～明治の合併後の諸富野村もろとのもら～

◇明治の大合併

明治22（1889）年の市制町村制の施行により、江戸時代以来の村々は、人口300～500人の規模への合併が進められました。これにより、常陸大宮市域に80以上あった村々も統合されて18か村になりました。今回は諸富野村の明治の合併についてご紹介します。

諸富野村は久慈郡に属し、明治22年4月1日、諸沢村、北富田村（天保13年に田野村と富根村・盛金村の一部が合村）、西野内村（以上すべて現在の山方地域）の3か村が合併して誕生しました。「諸富野村」という村名は各旧村から一文字ずつ取って付けられました。

諸富野村域は市の北西部、男体山系に連なる山間に位置し、北部には籠岩かごいわの奇岩、東には金砂山みょうやま（常陸太田市上宮河内町）があり、その間には明山があります。諸沢川と彦沢川が久慈川に向かって流れ、集落はその谷沿いに形成されてきました。

明治の合併前、明治5（1872）年に制定された大区小区制では、はじめ諸沢村と北富田村が第十二大区一小区、西野内村は第十三大区四小区とされました。明治8年以後は、3か村は同じ第四大区四小区に属しました。

明治11年には、旧来の郡町村の復活を盛り込んだ郡区町村編成法が制定され、さらに行政効率を高めるために数か村単位で行政を担う「連合村」が設定されました。これをうけて諸沢村と北富田村は2か村連合となり、西野内村は照山村、小貫村とともに3か村連合となりました。続く明治17年には改定され、更に大きな連合村へと改められましたが、諸沢村と北富田村は同じく2か村連合のまま、西野内村は小貫村、照山村と世喜地区の村々との7か村連合に改められました。

その後、明治22年の合併では、7か村連合に属していた西野内村が諸沢村、北富田村と3か村で合併することになりました。「古来三村は地理的にも、交通上も密接な関係にあり、その合併は自然であった」（『山方町誌下巻』）といわれる合併でしたが、その経緯は明らかではありません。

合併すると、初代村長には木村小一郎が就任し、諸沢字田中37番地（現在の公民館諸富野分館の東か）に役場が置かれました。その後、大正2年に字中平4445番地（現在の鏡泉院の南か）に移り、改築されました。

◇大正期以後の諸富野村

諸富野村には大正9年から昭和18年まで、計8冊の事蹟簿が残されています。



▲諸富野村事蹟簿（当館蔵）

事蹟簿は「模範的町村自治」を作り出すため、明治38年7月26日付の茨城県訓令により作成が義務付けられた村ごとの台帳です。内容は、村の沿革、土地、戸口、農林水産業、鉱工業、教育、兵事、社寺、議会など多岐にわたりました。明治後半から戦中期にかけて残されている例が多いようですが、その残り方は村によってまちまちです。

諸富野村事蹟簿によれば、大正9年の常住人口は2,982人、昭和4年は3,235人、同17年は3,315人でした〔この地域の平成25年の人口は982人（茨城県企画部「茨城県の人口（町丁字別）」平成25年）〕。

大正9年の事蹟簿には豪雨と洪水被害について記録されています。同年10月1日、茨城県北部から栃木県東部にかけて大雨とそれに伴う河川の氾濫が起り、久慈川、那珂川をはじめ緒川などの支流でも被害が出ました。この日が第1回の国勢調査当日であったため「国勢調査の大水」と呼ばれました。これにより、諸富野村域では西野内地区において死者1名を出し、家屋の被害も「全潰」19戸、「半潰」26戸、「浸水」60余戸に及びました。

【参考文献】

塙山嶺『久慈郡郷土史総論』宗教新聞社 大正13年、河野宏「常陸大宮市内における明治期の町村統廃合」『大宮郷土研究』9 平成17年

金子理一郎氏、堀江文男氏、堀江昭仁氏にご協力をいただきました。 文書館 ☎52-0571